

身体接触を伴うスポーツの経験が 心の発育・発達に与える影響

～コンタクトの違いによる大学アスリートの心理学的特徴の比較～

齋藤 実 (経営学部教授)

スポーツ時における身体接触は外傷を引き起こす要因の一つであり、事故が生じた場合には責任問題に発展する可能性がある。このことから、近年では身体接触を伴う競技種目(コンタクトスポーツ)が敬遠される傾向や、身体接触を排除したルールにて変更・工夫しているスポーツもある。その一方、学校内を含む若年層の暴力事件やいじめ問題で“他者の痛みを知らない”との指摘も存在する。これらの社会的背景には、身体接触の機会の少なさがその一因となっている可能性が推察される。このような背景から、本研究では幼少年期における身体接触を伴うスポーツの経験が心の発育・発達に与える影響を調査することを目的とし、2014年度から研究を開始した。本年度においては、スポーツを専門に行なっている大学アスリートを対象として、調査を行なった。本研究グループでは、これまでにスポーツ指

導者(99名)を対象として、スポーツのイメージと教育効果に関する自由記述による質問紙への回答を求め、Text Mining Studio(NTT数理システム社製)を用い、単語頻度解析、ことばネットワーク、単語共起分析からことば同士の関連を整理した(2014)。この結果、コンタクトスポーツのイメージと教育効果として、「(A)スポーツマンシップ」、「(B)攻撃性」、「(C)レジリエンス」、「(D)プライド」、「(E)社会的技能」、「(F)同情(痛み)」、「(G)情動的共感」の7つのカテゴリーが見出された。本研究では、このテキストマイニングのよる分析から得られたカテゴリーをベースとし、心理学において信頼性、妥当性が立証されている既存の質問紙を用いて質問項目の選定を行い、14因子、計43の質問項目について7段階の評定尺度法を採用し調査分析を行った。尚、調査は大学体育会強化部に所属する学生439名を対象とした。

回収した質問紙は、(1)コンタクトスポーツと(2)非コンタクトスポーツ、(3)接触型スポーツの3群に分類し分析を行った。尚、コンタクトスポーツは、ラグビー、相撲、アメリカンフットボール、レスリング、剣道、柔道、非コンタクトスポーツは、スキー、陸上競技、水泳、接触型スポーツは、相手との接触をしながらプレーを行う競技種目とし、バスケットボール、アイスホッケー、水球、サッカー、ハンドボールのそれぞれに分類した。コンタクトスポーツは計156名、非コンタクトスポーツは計92名、接触型スポーツは計191名であった。

回答結果は、14の因子においては平均値を算出し質問項目数で除すことで標準化を行なった。結果の分析にあたっては、計12因子についてZ検定法(対応のない平均の差の検定)を施し、有意差を検証した。また、各因子の関連を調査するために、因子間の相関分析を行

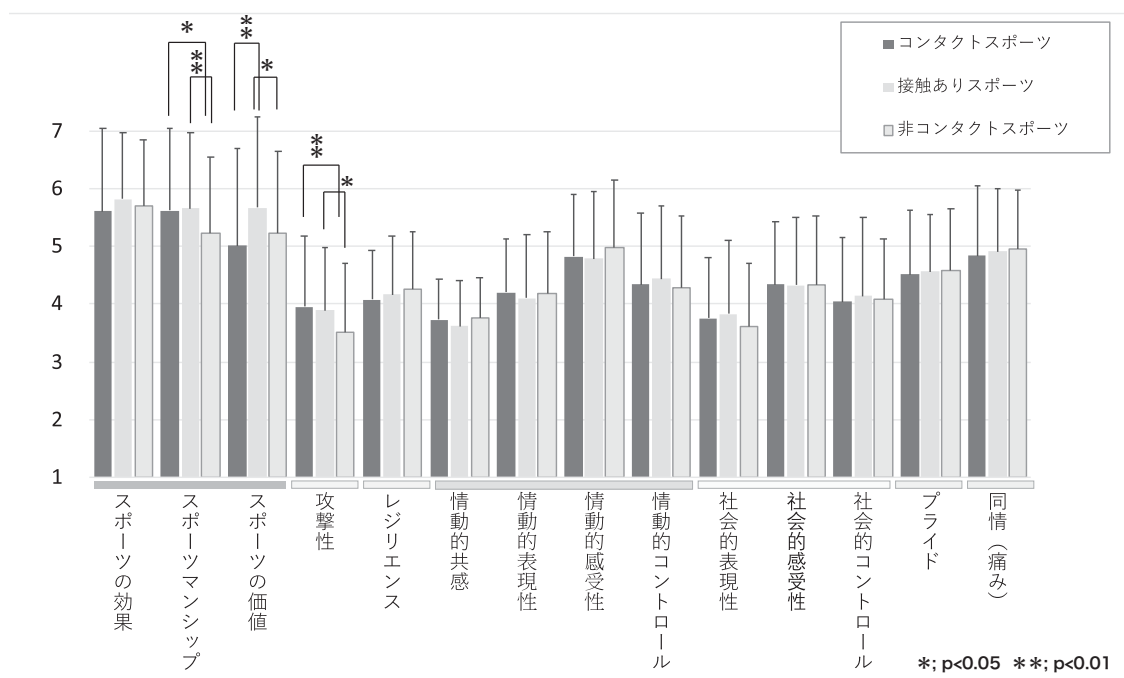


図1) 因子下位尺度合計得点の平均値の差

各因子の項目数にて除した平均値で示す

なった。尚、調査分析については、調査の目的とデータの分析方法を、対象者および専修大学スポーツ研究所研究倫理委員会の承認を得た。

その結果、本調査では、スポーツマンシップ(スポーツの効果、スポーツマンシップ、スポーツの価値)、攻撃性、レジリエンス、プライド、社会的技能(社会的表現性、社会的感受性、社会的コントロール)、同情(痛み)、情動的共感(情動的共感、情動的表現性、情動的感受性、情動的コントロール)の7つの心理面(14因子)について、コンタクトスポーツ、非コンタクトスポーツ、接触型スポーツの3群間の意識水準の比較を行った。この結果、因子の平均値においては「スポーツマンシップ」、「スポーツの価値」、「攻撃性」の3つの因子に有意な差が認められた(図1)。本研究では、コンタクトスポーツにおけるイメージや教育効果をもとに質問紙を選定したが、特にコンタクトスポーツ経験者で高くなると想定していた「レジリエンス」、「情動的共感」、「同情(痛み)」については、有意な差が認められなかった。「レ

ジリエンス」は、「深刻で危険な状況にかかわらず、適応的な機能を維持しようとする能力(Rutter, 1985)」、「人が不遇な境遇に出あったときに発揮される力(佐藤と祐宗, 2009)」とされ、恐怖を伴うような強いぶつかり合いを伴うコンタクトスポーツにおいては、非コンタクトスポーツと差異があると予想されたが、本研究においては有意な差を認めることができなかった。また、「誰かが助けを必要としているとき、助けてやりたい」、「困っている人たちがいてもかわいそうだという気持ちになる」などの質問からなる「同情(痛み)」や「情動的共感」においても、心身ともに痛みを感じやすいと考えられるコンタクトスポーツにおいて、非コンタクトスポーツと間に差は認められなかった。一方、因子間の相関分析については、コンタクトスポーツに特徴的な知見を得ることができた。コンタクトスポーツにおける「スポーツの効果」因子において、「情動的共感(.423)」、「プライド(.470)」、「同情(痛み) (.599)」に、「スポーツマンシップ」因子において、「同情(痛み) (.480)」に、「スポーツの価値」において「プラ

イド(.441)」と「同情(痛み) (.465)」に有意な正の相関が認められた(図2)。このことは、コンタクトスポーツにおいては、スポーツマンシップの意識が高ければ、情動的共感や同情(痛み)の因子も高くなることを裏付けるものと考えられる。

本研究の結果からは、コンタクトスポーツは非コンタクトスポーツと比較して「攻撃性」が高い傾向が認められた。その一方、同情(痛み)や情動的共感の心理面には、非コンタクトスポーツとの間に差を認めることはできなかったが、スポーツマンシップの因子とそれらの因子に相関関係を認めた。これらのことから、コンタクトスポーツにおいては、スポーツマンシップやスポーツの価値に関する意識が高ければ、相手の痛みを知ることや、情動的な共感が高まるということが本研究から示唆された。

本研究は「幼少年期における身体接触を伴うスポーツの経験が心の発育・発達に与える影響(JSPS 科研費 26560420)」の助成を受けたものです。本研究内容は、身体運動文化学会第23回大会(大阪教育大学)で発表した。
本研究を進めるにあたりご指導とご助言を賜りました法学部後藤肇先生に感謝の意を表します。

	スポーツの効果			スポーツマンシップ			スポーツの価値		
	コンタクト	接触型	非コンタクト	コンタクト	接触型	非コンタクト	コンタクト	接触型	非コンタクト
スポーツの効果	-	-	-						
スポーツマンシップ	**	**	**	-	-	-			
スポーツの価値	**	**	**	**	**	**	-	-	-
攻撃性	0.1318	0.1257	-0.0905	0.1944	0.1088	-0.0416	0.1021	0.0883	0.0499
レジリエンス	*	**					*	**	
情動的共感	0.1802	0.2038	0.1974	0.1551	0.1172	0.1753	0.2059	0.2185	0.1077
情動的表現性	**	**	**	**	**	**	**		
情動的感受性	0.4234	0.1926	0.3306	0.3615	0.1921	0.2718	0.2745	0.1240	0.1118
社会的コントロール	0.1067	-0.0574	0.2930	0.1432	0.0272	0.2241	0.0925	0.0551	0.2079
プライド	*	**	**	*	**	*	*	*	*
同情(痛み)	0.1910	0.2440	0.3853	0.1687	0.2022	0.2848	0.0489	0.1709	0.2211
社会的表現性	**	**	**	**	**	**	**	**	**
社会的感受性	0.3408	0.2394	0.4153	0.2516	0.2141	0.2883	0.3293	0.1875	0.1226
社会的コントロール	-0.0565	0.0816	0.2942	-0.1417	0.1772	0.1380	-0.0709	0.0372	0.0193
プライド	**	*		**	*		**		
同情(痛み)	0.3321	0.1589	0.1892	0.2587	0.1679	0.0370	0.2705	0.1350	0.1009
社会的表現性		**			**			**	
社会的感受性	0.0939	0.2153	0.1655	0.0431	0.1986	0.0918	0.0717	0.1975	0.0284
社会的コントロール	**	**	**	**	**	**	**	**	**
プライド	0.4700	0.3804	0.4012	0.3859	0.3827	0.3789	0.4412	0.3454	0.2734
同情(痛み)	**	**	**	**	**	**	**	**	**
社会的表現性	0.5292	0.3909	0.4112	0.4332	0.4054	0.1516	0.4654	0.3112	0.1850

コンタクトスポーツの特徴

スポーツの効果	情動的共感 (.423) プライド (.470) 同情(痛み) (.599)
スポーツマンシップ	同情(痛み) (.480)
スポーツの価値	プライド (.441) 同情(痛み) (.465)

コンタクトスポーツにおいては、スポーツ(スポーツマンシップ)の意識が高ければ、情動的共感や同情(痛み)の因子も高くなることを裏付けるものと考えられる

図2) 因子下位尺度の相関関係